



松川利広先生近影

松川利広先生を送る

棚橋尚子

奈良教育大学教職大学院教授松川利広先生は平成三十年三月末日をもって定年退職されました。先生は平成五年十月に奈良教育大学に着任され、国語科教育学の教員として多くの学生を指導されました。先生の研究室の卒業生たちは、全国の学校現場で学校の中核として活躍しています。平成二十年四月には国語教育講座を離れ教職大学院に異動されましたが、在任中は学長補佐や評議員、附属中学校長などを歴任され、奈良教育大学の発展のために常にご尽力くださいました。奈良教育大学国文学会はここに感謝の気持ちを込め、ご退任記念号を刊行いたします。

かつて新館三号棟に位置した先生の研究室はいつも華やかで紅茶の良い香りが漂っていました。学生たちから慕われ、かつ「本物志向」だった先生の研究室には、腹話術の人形、エプロンシアター、ハンドパペットなど、実際に子供たちを前に使うための道具が所狭しと飾られていました。実際に腹話術の人形を使っておいでのところを拝見したことがあります、とても楽しそうに人形と会話される先生に拍手したことを懐かしく思い出します。教職大学院に移られる際には、院設立にかかわる中心メンバーでおいでだったこともあり、多大な情熱やアイデアを新たな世界に注がれていました。「教室の名前を『演習室』『講義室』のようにしないで、『すばる』『ひらく』としました。」「教職大学院の入り口の掲示板上に院生一人一人の掲示コーナーを作ったんですよ。」―用があつて教職大学院棟の松川研究室をお訪ねすると、常に新しい試みをなさっていて、そのたびに刺激を受けていたことが思い出されます。研究室の机や棚をすべて手作りされた技術力も私には信じられないことでした。附属中学校の校長職に就かれてからは附属中学校と大学との往復でお忙しくなられ、大学の中でお目にかかることも少なくなりましたが、教育実習で附属中学校に伺うと、国語科の実習生から「校長先生がご懇切に指導してくださいました。」という声をよく耳にしました。このように松川先生はいつも人や物との関わりを大切になさっていたと思います。

多くのことに関心をもたれ、いつも前向きでおいでだった先生。「私の心はいつも十二歳の少年です。」と目を輝かせて次から次へと愉快なお話をしてくださいました先生。松川先生のご研究は多岐にわたりますが、中心をなす語彙教育のみならず、児童文学や国語学力などにも非常に造詣が深くおいででした。先生が奈良教育大学のキャンパスを去られたことは非常に寂しくありますが、先生の残してくださいましたものを引き継いでいくことをお約束いたします。長い間ありがとうございました。先生が今後ご健勝にご活躍くださいますようお願いいたします。